
桂ヒナギク！イギリス短期留学編!!

dandy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桂ヒナギク！イギリス短期留学編！！

【Nコード】

N7218H

【作者名】

dandy

【あらすじ】

別掲載の「ハヤテのごとく！！！！スーパー」のハワイ編終了からのアナザーストーリーです。：オリキャラ多用です。10000アクセス達成しました！ありがとうございます！！

第1話「ひとりぼっち、恐れずに知らない人にも声かけよう!!」
(前書き)

本当は盆踊り編に組み込んでも良かったかとは思ったのですが、イギリス↓日本↓イギリス↓日本…と場面がコロコロ変わると読みにくいと思い、別の小説を書くという形を取りました。ま、別に見なくても支障はありませんからご安心を。あくまでこちらはサブストーリー。こだわりはありません。あと…若干オリキャラ出すのに抵抗がありました。やはり世界観を壊したくないから。ちなみに外人のオリキャラだらけですがヒナギクは英語完璧という設定ですので全て日本語になってます。うわ…。手抜きバレバレだわ…。なんにしても見たい方は読んでね。

第1話「ひとりぼっち、恐れずに知らない人にも声かけよう!!」

―7月28日夜。ここは成田空港。私はハワイ旅行から帰ってきたばかりなの。…よく耐えたわ! 私! 怖い飛行機を!…けど

「…じゃあみんな…。また今度、会いましょう」

一緒に旅行に行ったメンバーは家路に着くのに私はこれからまた嫌な飛行機に乗るの…。訳は…

「ヒナ! イギリス短期留学、頑張れよ!」

そう。友達的美希が言うように私は学校の交流のためにイギリスへ短期留学するの。留学するのは構わないのよ。飛行機さえ、飛行機さえなければ…。

「ヒナさん? 震えてますけど…平気かな?」

「え!?! へ、平気よ! 長旅で疲れただけ!」

「疲れたって…飛行機で爆睡してたのに」

まあ…歩の言うとおりに寝てたけど…。

「ヒナギクさん」

「ハ、ハヤテ君。何？」

そうだった…。もうしばらくはハヤテ君には会えないのね…。

「ヒナギクさん。心配しなくても、僕がこれを大事に守りますから」

「え！？あ…うん。ありがとう…」

私はハヤテ君にヒマワリの髪飾りを預けたの。まあ…理由はいろいろあるんだけどね。

「あ、もう行かなきゃ！みんな、またねっ！」

私は留学に必要な荷物が入ったバックを片手にイギリス行きの飛行機へ。ちなみにハワイ旅行での荷物は三千院家のSPの方に家へ届けてもらったの。

紹介が遅れたわね。私の名前は桂ヒナギク。白皇学院2年生徒会長。

「……はあ」

ため息しか出ないわ……。当たり前よ！飛行機にこれから半日乗るなんて……考えただけで……。しかも一人だし。しょうがないからハヤテ君の言ったとおり寝てようかしら……。

「えっと…この席ね」

…！！ま、窓際！？ウソ！？…なんか運悪いわね。誰よ！こんな席を予約したのは！

（予約した方のコメント
「だって…あの子、窓際ならさらに恐怖に怯えると思って…」 I,
Kさん）

…そうだわ！二人席だし、隣の人と席を代わってもらえばいいんだ！
！そうだわ！それしかないわ！

フライトまで後10分。もう夜9時半ね…。隣の人、まだ来ないわね。

「あ、あの！」

「？」

私が横を見ると、そこには外人の女の子が。英語だったけど、なんとか理解できたわ。…まあ理解できなきゃ留学なんてできないけど。

「あの！と、隣、よろしいですか！？」

「ええ。どうぞ」

白い肌、黄色い目。…かわいいわね。背は…意外に高いわ。いくつなのかしら？

「ふうー。疲れた」

彼女は席に座るなり疲労感を露に。…なにを急いでたのかしら？

「あの…どうかしたんですか？」

私は聞かずにはいらなかった。彼女は一息ついてから話してくれたの。

「えへへ。実は日本にいる友達の家遊びに来たの。けど…別れがさびしくてさっきまで喋ってたら時間ギリギリでさ。危なかった」

「へへ。間に合ってよかったわね」

「うん！ところであなた、英語ペラペラね。日本人でしょ？」

「まあ…。これからイギリスに留学するの」

「イギリスに？私、イギリスに住んでるのよ」

「本当に！？」

「うん。なんなら途中まで一緒に行かない！？」

「え！？いいの？」

「いいわよ。私、エミリー。あなたは？」

「私はヒナギク。ヒナでいいわよ」

この後いろいろエミリーと話したの。エミリーは私と同じ高2で、

一人っ子みたいなの。

「…と、ところでエミリー？お願いがあるんだけど」

「？何、ヒナ？」

「席…代わらない？」

「な、な、なんで？」

「…？なんでって…。はあ…。言わなきゃダメか…。

「わ、私ね、高所恐怖症なのよ…」

これで代わってくれるわよね…

「嫌だ！」

「え？」

な、なんでダメなの？…と私が言う前に…

「じ、実は私も高所恐怖症…なんだ」

ああ…。そういうパターンね…。

「ならエミリー…。着くまで手を…離さないでよ」

ギュッ

私はエミリーの手を強く握った。エミリーも同じように強く握ってくれた…。

「ヒナ…。会って間もないけど…私たち、いい友達になれそうね」
「うん。そうね。改めてよろしくね、エミリー」

良かった…。同じ悩みを抱える者同士が力を合わせれば、なんとかいけそうだわ。いよいよ飛行機が空を飛ぶ！！絶対に…負けないわ

!!

「キャーッッッ!!」

でも…やっぱり怖いものは怖いのよ!! バカーッ!!

そんなわけで飛行機で知り合ったイギリスの女の子、エミリーと一緒に無事成田を出発。前途多難ね…。この短期留学…。

続く

第1話「ひとりぼっち、恐れずに知らない人にも声かけよう!!」（後書き）

…というわけでした。イギリス短期留学編です。ちなみにこんなツッコミはなしで。1、成田からイギリス行きの飛行機はあるの？2、時差がおかしい。…とかいろいろ…。話が進むにつれてツッコミどころが増えます。たぶん。そこは…お許しを！まあだいたい10話とかそのへんで終わらせたいです。需要があれば詳しく書くかもしれませんが前書きで述べたようにあくまでサブ。投稿期間は未定です。…でも途中で打ち切りにはしませんよ。非難、罵声を浴びようとも一応終わらせる覚悟です！ながーい目でみてください。では、次はイギリス本土上陸です。

第2話「さみしさ押し込めて現地の人と仲良くなってしまえ！」（前書き）

さてさて、前回一つ訂正が……。まあ気にならない点ですが。一応ご報告。I, KではなくA, Kでしたね。まあ書いてたのが深夜で頭がバクってました。ごめんなさい、愛歌さん！（もう隠してすらないし！）さて、サブらしく前書きはあまり長々とはやりません。正直、前書きって書くの大変なんです。ネタがなくて。というわけで次回から前書きは廃止します。盆踊り編では引き続きくだらない前書き&mp;後書きを継続しますが。ではヒナギクとオリキャラによるイギリス編をどうぞです。

第2話「さみしさ押し込めて現地の人と仲良くなってしまえ!」

うーん…よく寝たわねえ。…まだ着かないのかしら。

『みなさま、お疲れ様でした。当機はまもなく、イギリスへ到着いたします。シートベルトをしめて、席をたたないようお願いいたします』

…という機内放送。やったわ!ようやく着陸ね!エミリーを起こさないで。

「エミリー、着くわよ」

「うー…お母さん、あと一時間だけ寝かせて…」

…ダメだわ。何度ゆすつても起きないし。よっぽど疲れたのね。

そんなわけでもうやく長旅も終わってイギリスに到着。ああ、大地
ってすばらしいわ！

「着いたね、ヒナ！」

「ええ。…でも、ここでエミリーとはお別れね…」

「うん…」

ちょっとしか過ごしてないけど…さびしいわね。

「じゃあね、ヒナ！またいつか会いましょう！」

「うん！バイバイ、エミリー！」

…ってアレ？

「…ヒナもこっちに行くの？」

「そうだけど…。もしかして行き先が同じ方向なのかしら？」

「そうみたいね。じゃあ…また途中まで一緒に…」

どうやら私たちの行き先は同じ方向らしいの。偶然ってあるものね。
。

「このバスで行くのよ。これからお世話になる家に」

「へ？ヒナもこのバスに？」

「も…ってことはエミリーもこのバスに？」

「そ、そうよ」

「な、なんだかこのまま同じ場所に行く勢いね」

「本当！ハハッ！」

そしてバス停に着いたの。さすがにここでお別れよね…。

「……………」

「……お、同じバス停で降りるとは…」

「ぐ、偶然よ！ねっ！」

偶然にしては行き過ぎじゃないかしら…。

「もしかしてヒナ、家にホームステイするんじゃないの？」
「ま、まさかそこまでは…」

「そうよね。でもヒナが家に来るなら大歓迎よ！」

「本当？ならいつか泊まりにいいのかな」

…その言葉はすぐに現実…。

「わ、私、このお宅に泊まることになってるんだけどさ…」
「…ここ、私の家よ」

「「えええーっ!!?」」

こ、ここまで偶然って重なるものなの！？

ガシッ！

エミリーは私の手を握ってきた。そして…。

「わあ！！ヒナと一緒に暮らせるんだ！これも何かの縁ね。よろしく！」

「ええ！よろしくね！」

私たちが意気投合するのに時間はかからなかった。家に上がるとエミリーのお母さんが出迎えてくれたの。

「あら、いらっしやい。あなたが日本から来たヒナギクちゃんね」

「はい。短い間ですがお世話になります」

「家を我が家だと思ってくつろいでね。…で、なんであんたも一緒にいるの？」

「いいじゃない！ヒナとは飛行機から一緒だったのよ！運命よ！運命！」

「やだわ…。ヒナギクちゃん、家の娘が迷惑かけなかったかしら？」
「ちよっ…！どういう意味よ！」

な、なんだか面白い家族ね。でも…なんだか打ち解けやすそうだわ。

「さ、ヒナ！もう夜も遅いし、私と一緒に寝よう！」

「う、うん。ではお邪魔します」

「はい。ごゆっくり」

さすがに海外ね。履き物は脱がなくていいんだ…。

「ここが私の部屋よ。ごめんね。散らかってて」
「ううん。気にしないから」
「ベッドは下を使っていいから。あー、疲れた…」

…え？二段ベッド？

「あの…エミリー？一人っ子よね？」
「そうよ」

「なんで二段ベッドがあるのかしら？」

「実はね…私…」

…な、何かしら？

「二段ベッドの上で寝るのが夢だったの！」

…へ？

「私さ、一人っ子だから姉妹ってやつに憧れてて…。だから誕生日に二段ベッド買ってもらったんだ♪」
「そ、そうなんだ…」

面白い子ね…。

「ヒナには姉妹いるの？」
「いるにはいるけど…」
「え！？ど、どんな人？」

…どんな人って言われても…。

「一言で言うとは…。破天荒なお姉ちゃんよ」

「…へー。なんか楽しそうね！」

「まあ…ね」

「じゃあエミリー。私は明日、この近くの高校の講義を受けるからもう寝るわね」

「わかったわ。また明日いっぱい話をしましょう。…ところでこの高校に行くの？」

「えっと…ホリブリッジ大学附属高校…だったかしら」

「ホリブリッジ!?!…めっちゃくちゃ頭いい高校よ!」

「そ、そうなの？」

「うん! やっぱりヒナはすごいよね」

…へー。そんなすごいのかしら？なんか不安になってきたわ…。

「けどさ」

「けど…何？」

「さっき着替えを見たけどバストはたいしたことないわね」

「な！…ちょっとエミリー！！な、何を！！気にしてるんだから言わないでよ！！」

「ま、ヒナは脳みそにたくさん詰まってる分、体がおろそかになっただけね」

「ううっ…」

「冗談よ♪じゃ、おやすみ♪」

「もう…。おやすみ」

こうして初日は終了したの。明日はいよいよ講義ね。なんとかなるわよね…。

続く

第2話「さみしさ押し込めて現地の人と仲良くなってしまえ！」（後書き）

疲れてますから。許してくださいね。私はすぐに疲れると体の話やらそっちに行っちゃいます。わー…。オッサン丸出し。別にはげてはいませんが。さて次回は講義の話とiiiiつづ教養的な内容は皆無です。だって…ホリブリッジですから。ちなみにホリはホリケンのホリです。ケン○リッジがあるから。わー…。くだらない。まあ軽く受け流して下さいな。まあこちらの完成度は本編を10とすれば2くらいなので仕方ありませんね。ぼちぼちクライマックスです。早い！ま、たらたらやるよりかはいいと思うので…。では本編（盆踊り編）もよろしくです。

第3話「強い自分を守ってこ！たとえ勝てない勝負であろうがなろうが」

「じゃあ…行ってくるわね。夕方には帰るわね」

「うんっ！でも夏休みなのに勉強なんて…」

「まあ…勉強がメインなのよ、エミリー…」

「そうだったわね！行ってらっしゃーい！」

私はエミリーの家を出て学校へ向かうところなの。あ、もちろんバスよ。ちゃんと日本円はユーロに換金したから平気よ。

ここが私が講義を受ける学校か…。エミリーが言うにはなんか頭がいい人ばかりらしいけど…本当なのかしら？…大きい時計塔ね…。白皇に似てるわね。けど絶対に行かないわよ！

うわー。ここが講義を受ける教室か…。やっぱり夏休みだから人が少ないわね。せっかくだし、一番前で受けようっと！！

「あの…ちょっと、君」

「え？はい…なんでしょうか？」

…誰？

「見ない顔だけど、不審者じゃないよね」

「ち、違いますよ。私、ヒナギク。日本からの留学生です！」
「留学生…か」

ま、この男の子が私を不審者扱いするのも無理ないわね。

「それにしてもかわいいね。歳、いくつ？」

「…16」

「へえー。きれいな髪してるね」

…ちよっ…！何よ！髪なんか触って…！

「僕はベイ。ここの高校の生徒会長さ」

「生徒会長？…あ、あなたが？」

金髪、青い目…。しかもだらしない服装…。こんな人が生徒会長なんだ…。

「…というわけで今からお茶しない？」

「な、なにがというわけでなんですか！！これから講義なのよ！？」
「講義？僕は生徒会長だから仕方なくきてるだけさ。なんなら今から僕が君に講義してあげてもいいけど」

もー！なによ、この人は！勘違い甚だしいわ！

「悪いけどお断りします」

「なぜ？この学校の女の子はみんな僕とお茶することを夢見るのに…」

あー！誰か助けてー！

「おいっ！ベイ！」

どこからか一人の女の子がやってきた。私より背は低い。ツインテールで…黒い髪。…ナギみたいね。

「こら、ベイ！また他の女の子といちゃついて！私という女がいな

がら！」

…え？この人、彼女がいたの？

「なんだよー。今、いいとこだったのに。な、ヒナギク」

な、なによ、勝手に…。

「はあ！？…誰？この女？」

「え…私、ヒナギク。日本からの留学生ですけど」

「日本？あの田舎島国か」

…なんか嫌な子。

「よーし！なら今から私とベイを賭けて勝負よ！」

「な、なんでよ！！あなたたち付き合ってるんじゃない？」

「付き合ってるわよ！けどあなたがその愛を邪魔したんじゃない！
！」

「はあ!？」

か、勘違いカップルね…。

「ちなみに私はミシェル!フェンシング部部长よ!もちろんフェンシング勝負よ!」

「フェンシング…!」

「ヒナギク。怪我するからやめときな。こいつはバカだがフェンシングだけは強いから」

「ベイ!バカとは何よ!」

「だってお前、フェンシング強いからこの学校へ入れたんだろ?」

うそ!スポーツ推薦ってやつ?…なら尚更負けられないわ!!

「いいわね、島国留学生!」

「その呼び方は気にいらないけど…いいわ、やりましょう!」

ここがフェンシング場か…。私だって剣道やってるのよ！ま、負けない！

「さ…あんたが負けたらベイから手を引くのよ！」

「……ま、勝手も引くわよ！そのかわり私が勝ったら…」

「あり得ない！あんたが勝つなんてね！」

「む…！行くわよ！」

いざ勝負よ！

キン！

え！？もう、弾かれた！？

「弱!! さすが島国留学生! 一瞬よ! どう、ベイ!」

「いや、お前が負けたらなんでこの学校にいるかわからないだろ」

「!! ちょっとは誉めなさいよ、バーカ!」

…なんか私、ほったらかしね…。

「はっ! 講義、始まっちゃう!!」

…あれ? ここ、どこ? し、知らないところに連れてこられたから教室にいけないじゃない!! しかもあの二人もいないし!! なんなのよ、バカーッ!!

結局初日の講義は受けられなかったわ…。時間はあったけど…。途中から入るなんて恥ずかしいし…。

「けど…学校内にこんなカフェがあるなんて…すごいな」

「白皇の生徒会長もそう思うか…。まあすばらしい学校に変わりは
ない」

「そうね。…って日本語！？あ、あなたは！！」

聞いたことのある声。振り返りそこにいたのは…。

続く

第4話「歩きつかれ、たたずむと、バスに乗ってどこかへ行きたくなるかも」

「あなたは…！」

「久しぶりですね。生徒会長」

「…ど、どうしてあなたがここに…!？」

「ここは高校と大学が同じ敷地内にあるので別に不自然ではありませんよ」

「いや…そうじゃなくて…」

もー！全然話が噛み合わないわね！

「だから…何でイギリスにいますか？野々原さん」

「おや、生徒会長さんには言ってますませんでしたっけ？私、高校を卒業したらイギリスに執事留学するってことを」

…そうなんだ。だから東宮君が最近1人でいることが多かったのね。

「けど…東宮家の執事なのに、いつまでも留学してて…大丈夫なんですか？」

「坊っちゃんなら心配ご無用。私がいないうちに少しでも成長してくれたらそれでいいですよ」

ふーん……。なんだかんだで東宮君が気になってるんだ。

「そうですか。じゃあ頑張ってくださいね」

「ええ。何かあれば私が力になりますよ。では……」

そう言って野々原さんは私が講義を受けた建物違う建物へ向かっていった……。あっちが大学なのかしら？

キンコーンカーンコーン…

ふー！今日の講義はおしまいかー…。さてと…帰ろうかしら。

「あの…すみません」

「へっ？私ですか？」

「はい…」

振り向くとそこには赤い髪で眼鏡をかけた男の子がいたの。…この人も講義を受けてたのかしら？

「あの…見ない顔ですが…転校生ですか？」

「ううん。短期留学に来たの。日本から」

「日本から…？」

「…何よ。あなたもあんな島国から来るなんて…とか思ってるわけ？」

「ち、違います！そんなわけですよ！」

…そうよね。なんだか嫌味みたいに言っちゃったわね…。

「それで…私に何かご用ですか？えっと…名前は？」
「あ、僕はコーフって言います」

コーフ？…なんか珍しい名前ね。

「コーフ君が私にご用ですか？」
「えっと…その…あの…」

…うじうじして…イライラするなあ…。

「言いたいことがあるならさっさと言いなさいよ！男でしょ！？」
「は…はいっ！えっと…す、す、す…」

す？

「好きです！付き合ってくださいっ！！」

…え！？な、なにを急に…そんなの…！？

「なにを言ってるのよ！！…今会ったばかりなのに…」
「一目惚れです！あなたみたいな人がいたなんて…好きにならずに
はいられません！！！」

…悪いけど…。

「…ごめんなさい。あなたの期待には答えられないわ」

「ど、どうしてですか！？…まさかもう誰かと付き合っているんですか！？」

「付き合っていないけど…。す、好きな人がいるのよ。日本に…」

「あ…。そ、そうなんですか…。ご、ごめんなさい…。無理を言うて…」

そして彼はとぼとぼと教室を出ていったの。…悪いけど…私は…。

「はあ…。でも…告白か…。やっぱり…勇気がいるのかしら」

帰りのバスの中で1人呟く私。日本語だし、誰も分かってないよう

だわ。

「うかうかしてたら…ハヤテ君も誰かに告白されて…付き合ったりしちゃうのかな…?」

…なんか…不安になってきた…。会いたいな…。ハヤテ君に…。

「…って…何を考えてるのよ!今は留学中!勉強だけに集中よ!」

「ただいまー」

「あ、おかえり、ヒナ!…どうだった!?」

「うーん…。やっぱり内容は難しいわね」

「そっかー。やっぱり頭いいんだ、あの学校」

…そう言えば聞いてなかったけど…。エミリーは誰かと付き合ったりするのかしら？

「…どうかした？ヒナ」

「え！？いいや、なんでもないわよ、エミリー！」

「…あ、そうだ！後で家に友達が来るから！！」

「…友達？」

「昔からの友達でさ、家も近いの。今は違う学校だけどよく遊んだりするんだ。なんか相談があるとか言ってたわ」

「女の子？」

「男よ。安心して。ヒナになんかしたりしないから」

「別にそんな心配はしてないけど…」

「冗談よ。さ、私の部屋でくつろいでよ」

「うん。ありがとう」

ピンポーン！

あ、来たのかしら？

「よく来たわね。さ、あがって。1人、友達がいるけど手を出しちやダメよ」

「だ、出すわけないだろ！」

下からエミリーと男の子の音がする。どんな子かしら？

ガチャ

「さ、入って。この女の子がヒナギクちゃんよ」

「あ、はじめまして」

「こちらこそ、はじめまして…って!」

え!?!…う、うそ!!

「エ、エミリー!?!友達って…この男の子!?!」

「うん。ほら、自己紹介くらいしなさいよ」

「…あ…あ…その…!」

な、なんで…こんなことに…!?

「もー!なに緊張してるのよ。ヒナ、この子が友達のコーフよ。よろしくね」

「…よろしく願います…。ヒナギクさん…」

「……はい……!」

ど、どうしてイギリスまで来て…こんな気まずいことになるのよー
っ！！！

続く

第5話「浮かんでくる故郷の町とその町に住む好きな彼」

「……………」
「……………」

く、空気が重いわ…。エミリー…なんとかして…。

「…で、相談ってなんなのよ？ 恋がどうか言ってたわよね？」
「あ…いや…その…」

こ、恋！？まさか私にフラれたこと…悩んでるのかしら…！？

「あ…！僕、急用を思い出した…！じゃ、じゃあな…！邪魔したな…！」
「え？ ちょっとコーフ！？」

ガチャ、ボタン！

…行っちゃった…。わ、私、どうすれば…!?

「なんなのよ、アイツ。あ、ヒナは気にしないでね。アイツ元々変なやつでさ…ってヒナ? 顔、赤いわよ。大丈夫?」

「ほえ!?!…え…あ…」

「…なにかあったの?」

…エミリーに話して…楽になろう…。1人で悩んでも仕方ないし…。

「あの…エミリー…」

私は今日学校でコーフ君に告白されたことを話したの。さすがにエミリーもびっくりしたみたい…。

「へー…。アイツが…ヒナに…。告白!？」

「うん…。『好きです』って…」

「驚いた…。でも断ったんでしょ？」

「…でも彼、悩んでたみたいだし…」

「そんなことヒナが気にすることじゃないよ。気にしない、気にしない」

…いいのかな?それで…

「でもヒナはモテるわね。やっぱりかわいいからね。告白されて当然よ」

「…エミリー…」

「でも…ヒナは今まで告白されたこと、ないの?」

「あるわよ…。そのたび断ってきたわ。…けど、それは日本だから悩まずに断れたの。でも…彼は私が留学生だと知ってて告白してきた。もう二度と会えないかもしれないのに…。そんな彼の勇気を…私は…簡単に裏切っちゃって…」

「…悩んでるとこ悪いけど私はその気持ち、よくわからないなあ」

…え？

「仮にヒナが情けで彼の気持ちを受け入れても…逆にコーフが辛いだけよ。恋なんて報われたり、報われなかったり、いろいろあるんだから」

「…あ…そうかな…」

「ま、私も付き合うまでいろいろあったしさ」

「え！？エミリー、彼氏がいるの！？」

「いるわよ。彼氏の1人や二人。…てかヒナ、付き合ったりしたこと…ある？」

「…ない」

「なんで！？そのほうがびっくりよ！！でも好きな人くらいいるわよね！？」

好きな人は…いるけど…。

「でも…怖い」

「怖い？フラれるのが？」

「誰かを好きになっても…私の前からいなくなったらどうしようって…。あんな思いは…もうしたくないから…」

あれ?...なんで私、涙が出て...るの...?

「...ごめん、ヒナ。嫌なこと聞いちゃって...」
「い、いいのよ! 気にしないで!」

私ったら...なにを...!!

「でも...一ついい?」
「なに? エミリー」
「悩んでるなら...! 話すだけよ...!」
「え!?! そ、それは...!?!」
「冗談よ。まあ本当に気にしないで。ヒナは...留学に来てるんだから...!」
「うん...。そうね...」

私は結局悩んだまま次の日を迎えることになっちゃった...!

はあっ！はあっ！

タタタタタ…

ち、遅刻だわ！なんかいろいろ考えてたら…起きるの遅れちゃった
！！

「は、はあっ…。つ、着いたわ…。早く入ろ…」

ガラガラ…

え？中から人が…

「…あ！ヒ、ヒナギ…！ヒナギクさん…！」
「…コーフ君…！？」

え！？い、いきなり会うなんて…！？

「…すみません、では…」

え！？コーフ君、行っちゃうの！？…逃げてたらダメよ、ヒナギク！
ちよつと話をして謝らないと！

「ちよつと待ってよ！」

ガシッ！

私はコーフ君の腕をつかむ。

「え！？ヒ、ヒナギクさん！？」

「逃げるなでよ！私のこと好きなんでしょ！？…ちよつと話…いいかしら？」

「…はい…」

こうして私は彼を話に誘ったの。…私の悩みは吹き飛ばかしら…。

続く

第6話「どんな挫折そうな時だってあなたを想えば迷わない!」

私たちは外のベンチにやってきた。…ここでいいかしら。

「あの…ヒナギクさんは講義のはずじゃ…」

「そうだけど…。こんな気持ちじゃ、勉強なんかできないわよ!」

ふー…。さて…。

「…悩みて…私のことよね? 正直に答えてよ」

「…はい」

「どうしてそこまで…? やっぱり一目惚れ…なの?」

「…似てたんです」

似てた?…誰に?

「僕の…母に」

「お母さん…に?」

「僕の母は…日本人だったんです」

「だった…って…どういうこと？」

…あれ？どうしたのかしら？

「亡くなったんです。三年前に…」

「え！？…ごめんなさい…。私、そんなこと知らなくて…」

「いいんです。ヒナギクさんには関係ないですし…。バカですよ。似てるからって告白するなんて…」

「そんなに…似てた？」

「はい…。そっくりで…。母はよく日本の話をしてくれました。

僕の名前も母が大好きだった町をつけたらしいです」

「…甲府？」

「それはわかりませんが…」

泣いてる…。そんなに好きだったのね。お母さんのことが…。

「すみません…。同情を引こうとしたりして…」

「そんなことない…。だけど、私は…やっぱりあなたを好きにはなれないの。ごめんなさい…」

「…ヒナギクさんが好きな方は…どんな方なんですか？」

え？…ハヤテ君…は…。

「優しくても時々ドジったり…。でも、なんだか気になる人なの。誰にも…渡したくない！」

「…告白…したんですか？」

「告白！？…しないわよ。告白なんて恥ずかしいし…。でもあなたはすごいわね。告白できるなんて…」

…こんなこと言っても私はコーフ君と付き合う気はない…。やっぱり傷ついただけなのかな…？

「わかりました。では…勝負ですね！」

「勝負…？誰と？」

「その日本の方とです！いつか…僕が…その方よりふさわしい男になって…あなたにまた告白します！…たとえまたフラれても後悔しません！…またいつか、日本で会ってくれますか？ヒナギクさん」

…この人…強い…！

「わかったわ…！ありがとう！じゃあ…また日本で会いましょうね！でも…私のことばかり考えて勉強がおろそかになったら…許さないわよ…！！」

「…あ…はい！では…さようなら！」

…行っちゃった…。…こんな話したら…疲れちゃった…。

「おや？留学にきたのにサボりですか？」

「…野々原さん。あなたこそ授業は…？」

「いえ。今日は自習に来たんですよ。…なにをしてたんです？」

「べ、別に…！！で、ではまた…！！」

「はい。さようなら」

タタタタタ…

「ただいまー…」

はあっ…。講義もなんだか耳に入らなかったな…。明日からまた頑張ろう…。

「おかえり！ヒナ、ちょっと留守お願いね♪」

「え…？エミリー、出掛けるの？」

「うん。彼と今からデートだから」

デート…か。

「ヒナもさ、日本に帰ったら好きな彼をデートに誘ったら？」

「な！？ちょっと…急に…！？」

「恥ずかしいんでしょ？だんだん解ってきたわ、ヒナの性格」

「うう…！何よ！私だってデートに誘うくらいできるわよ！」

はっ！つい勢いで…！

「なら…約束よ。帰ったら好きな彼とデートすること。いいわね？
じゃっ！」

ガチャ、ボタン！

デート…。デートよ！そうよ、ヒナギク！たかがデート！告白する
よりかは気は楽！ハヤテ君と会う約束もしたし…大丈夫！

次の日。

タタタタタ…

また遅刻よーっ！デートなんか意識するからまた起きられなかったじゃない！

（本人は気付いてませんが若干時差ボケの影響があります。若干）

「…では授業を終わります」

…むにゃ…むにゃ。…え！？講義終わってる！？…後半寝ちゃった
…。あー！私のバカーツ！

「それと…留学生の桂君、今から職員室に来てください」
「え…。わかりました」

な、なにかしら。まさか寝てたのバレてた！？…だ、大ピンチ！

続く

第7話「決して涙は見せないで！痛くても！悔しくても！どんなにバカにされど

職員室に呼ばれた私。なんなのかしら…？

「桂君。君はたしか…白皇学院では剣道部に所属していたらしいね」
「はい」

（…なんだか辞めたみたいな言い方ね。ま、いいけど…）

「一つ…頼みがあるんだ。いいかい？」
「なんですか？」

「実は我が校にも剣道部があるんだが指導する人がいなくて部員も少ない。…ちよつとでいいんで指導してくれないかい？」

「え！？…わ、私なんかでいいんですか？」

「聞けば君はかなり凄腕の実力を持つそうだね」

「……」

（誰に聞いたのかしら？）

「では…あとで剣道部に顔を出してくれ」
「あ…ちよつと！」

「少し動けば眠気も覚めるんじゃないか？」

「うっ…！」

（…寝てたの…バレてたのか…）

そして先生はどこかへ行ってしまったの。…まあ剣道を教えるくらいなら…。

ここが剣道場か…。外観はきれいな建物ね。

ガラガラ…

早速入る。…3、4人しかないわね。

「あのー…すみません」

「はい。なんですか？」

「私、ヒナギクって言います。…剣道を指導してくれて頼まれた

のですが…」

「…ああ。君が…。待ってたよ。僕は部長のリック。じゃあ早速頼むよ。はい、防具」

…まさかイギリスまで来て剣道するとは…。

「では…よろしく!」

「はい!…手加減しませんよ!」

「はじめっ!」

いくわよっ!

「胴ーっ!」

バチイイイン!!

「いてええええ!!」

…え？

「うぐう…」

「部長！大丈夫ですか！？」

「脇が…！脇が…！」

結局リック部長は私の胴を受けて運ばれちゃったわ…。…指導以前の問題ね。

「あの…ヒナギクさんでしたっけ？」

「はい」

「もっと手加減してくださいよ。あんなの…」

「僕ら週3でやってるサークルみたいな部活なんですから、いきなりプロの技を見せないでくださいね」

「はあ…。すみません」

（プロ…？誰が…？）

仕方ない…。手加減してやらなきゃ…。

「フッフ！誰が病院送りになったか見に来たら…軟弱剣道部の部長だったのね」

…この声は…！

「あなたは…ミシエル！？」

「あら…。あなたはたしか島国留学生。まだいたの？…てかここで何してるのかしら？」

ミシエルのまわりには取り巻きが5人。何様よ。

「私はこの剣道部の人たちに剣道を教えにきたのよ」

「あなたが！？ハハッ！ま、あんたみたいな島国留学生は軟弱な男にしか教えることはないもんね」

「ううっ：！何よ！あなたこそ何しに來たのよ！」

「約束を果たしに來たの」

「約束？」

「あなたには関係ないけど：私たちフェンシング部は全英大会にも出場するエリート部。かたやこっちは大会にも出られない落ちこぼれ部。最近部員が増えてきて練習場所が確保できないのよね」

「：まさかあなた！」

「勘がいいわね。そうよ。この剣道場をフェンシング部の練習場所にするの」

「剣道部の人たちはどうなるのよ！」

「そんなの：私の知ったことじゃないわ」

：私、今はこの剣道部には関係ないけど：。この人の行いは許すわけには行かない！

「で、今日は決着をつけに來たの」

「決着：！？」

「そう。剣道部部长とフェンシング部部长の私が剣道で勝負して負けた方が勝った方の意見を呑むのよ。剣道部なんだから剣道で勝つのは当然よね：？」

「……」

（まずいわ。さっきのを見る限り、他の部員が部長より強いわけない…。始めから勝負は決してる…!）

「それに…部長はいないみたいね。じゃあ不戦勝ってことに…」

「待ちなさい!」

「何かしら? 島国留学生」

「その勝負…! 私が受けるわ!」

「あなたが…? やめなさい。前みたいにやられるだけよ」

…うつ…! だけど…逃げるわけには…!

「ヒナギクさん! 僕らのために戦うことはないですよ!」

「そうですよ。あのフェンシング部部长は全英準優勝の猛者です。

たとえ剣道でも負けるわけないですよ!」

「準優勝…? へえ…。優勝してないんだ。なら…たいしたことないわね」

「!…! 島国留学生…! あなた…もう二度と足腰立たないようにしてやるわ!」

「やってみなさいよ。白皇学院剣道部、桂ヒナギクの実力、あなたに見せてあげるんだから!」

「おもしろい…! なら負けた方は髪の毛をバツサリ切るってのはどう? 自信があるならそれくらいできるわよね…?」

「…いいわよ。早く胴着をつけなさい!」

「いらないわ。だってあなたから私は一太刀もくらうつもりはないから」

この…！どこまで剣道を…私をバカにするつもりよ！

「なら…もう心配しないわよ！痣だらけになっても知らないから！」

「余計なお世話よ！島国留学生！」

「いざ、勝負！」

こうして髪の毛& a m p; 剣道部存続を賭けた勝負が始まったわ！

！…見てなさい、フェンシング部部长、ミシエル！！

続く

第8話「心なしか歩調が遅くなる…。思い出をたくさん作るために」

「さあ…始めるわよ！島国留学生！」

「…てゆうかその呼び方はやめなさい！！」

「ふん…。島国出身のくせに生意気ね！」

イギリスだって島国じゃない！！…って言ったらここにいる全員を敵にまわしそうね…。

「両者、前へ！」

へー…一応ここの剣道部員も礼儀は知ってるんだ…。

「…ミシエルさん。蹲踞してください」

「蹲踞？なにそれ？勝負に関係ないわ」

…な！…なによ！

「ちょっと！剣道の試合前は蹲踞しなきゃいけないのよ！そ・ん・きょ！」

「する意味は？」

「そういう問題じゃない！これは相手に対しての礼儀を示す行動なの！」

「礼儀…？これから戦う相手に礼儀なんていらないわ。剣道って…案外甘いよね」

ぐ…！もう何を言っても無駄みたい…！

「剣道は神の教えの道なれば…ヤマト心を磨くこの技…！」

「なにそれ？」

「…剣道はね、勝負以外に精神的強さや人を敬う心を身に付けられるんだから！」

「…お喋りはもういいわね？…さっさといくわよ！」

…絶対負けない！

「はじめっ！」

いくわよっ！…って！？

バチィ！？

「ちょっと…あなた…突くなんて反則よ！」
「あら…フェンシングならありだけど…？」

なんとか防いだけど…防具なしだし…早く終わらせないと大ケガだわ！

「次はこっちの番よ！面ーっ！」

バチィ

「ずいぶん直線的ね！」
「突きに言われたくないわ！はあっ！」

次は…！

「胴っ！」

「無駄よ！はあっ！」

バチィ！

また突き！？

「はあっ！はあっ！」

く…本当にルール無用ね！突きしかしてこない…！！
！！スキができた！！

「面ーっ！」

パチィ

「…よく防いだわね…」

「島国留学生…あなた…なめてるの？」

…バレた

「私がケガしないように…さっきから手加減してるわね！」

「そうよ…。言ったでしょ…剣道は勝つだけじゃないって…!!」

「…ふざけるなあ!!」

パチィ!!

「痛っ…!!」

「あら…体に当たったし…私の勝ちかしら？」

「残念だけど…肩に当たっても…技にはならないわよ…」

くっ…！油断した…！痛い…！

「なら…次は頭よ！」

グワッ！

…もうこれが最後の攻撃！外したら…負け！

「籠手ーっ！」

バチイイイ！

「キャアア！」

「やった…！勝った…！」

痛…！勝てた…

「それまで！勝者、ヒナギクさん！」

「ウソよ…！」

「ふうー…。ミシェル、私の勝ちね。これで剣道部は存続ね」

良かった…

「まだよ！まだ！」

「え！？どういうことよ…！」

「剣道なんか…知らない！フェンシングで勝負よ！」

「はい…？何、今さら…」

負け惜しみ…？フェンシングなら勝てるっていうの？

「ただしこれは剣道部は関係ないわ…。私の面子の問題…！…負け
たままなんて…絶対嫌…！」

「…いいわ…！受けてたつわ…！けど…1日待って…！」

フェンシング、すこしは知らないと…前の二の舞だわ！

「いいわよ。明日の午後2時。フェンシング場で待ってるわ。負けたら今度こそ…髪を切りなさい！」

「なら…私が勝ったら…私を島国留学生って呼ばないでよ！！！」

「いいわ。じゃ…せいぜい最後の長髪を堪能しなさい…」

行っちゃった…。痛っ…

「じゃあ…剣道部のみなさん、私はこれで…」

「はい！ありがとうございます！」

そして私はとりあえずフェンシングのルールなどをするために図書館で本を借りて家に帰ったの…。

「ただいま…」

「あら。おかえり、ヒナ。…どうしたの？」

「あのさ…包帯なんかある？」

私はエミリーに肩に包帯を巻いてもらうことに…。

「このアザ…突かれた？」

「え？ どうしてわかるの？」

「私もさ、よくフェンシングでこういうアザできるんだ」

…え！？ 今なんて…！？

「え！？ エミリー、フェンシングやってるの！？」

「フルーレだけどね」

「なら…ちょっと相談が…」

私は明日フェンシング部部长と勝負することをエミリーに言ったわ。

「…もしかしてフェンシング部部长ってミシェル？」

「うん…。有名なの？」

「ま…一応全英準優勝だしさ…。それよりそんな強い相手なら早く練習しないとね！さ、始めましょ！！！」

エミリーの家にはフェンシングの道具が一式揃っていた。すごい…！

「でも…勝てるかな？」

「ヒナなら勝てるわよ！時間がないわ、始めましょう！」

そして夜までエミリーの指導の元、フェンシングの練習をした…。
決戦の時は近いわ…！

続く

最終回「帰りたい。帰れない。さよなら…みんな…」

日本に帰る1日前。遂に決戦の朝…。でも…こんなこととしていいのかしら？当初の目的と全然違う…。

「ヒナ？何を考えてるのよ。なんだか上の空って感じね」

「エミリー…。別に…」

「あ！！もしかして昨日私に練習で一度も勝てなかったから落ち込んでるの？」

たしかに昨日はエミリーに一度も攻撃がヒットしなかったけど…。たしかにそれも不安だわ…。

「たしかに剣道に突きはないからフェンシングは得意じゃないかもね」

「どうしよ…。負けたら…」

「負けるかもね。さすがのヒナも」

「ちよっ…！そんなストレートに言わなくても…」

負けたら…この髪を切らなきゃいけないなんて…。もし短い髪で帰ったら…。

ここからしばらくヒナギクの回想です。

「あ、ヒナギクさん。おかえりなさい。…あれ？髪の毛…どうしたんですか？」

「あ！！こ、これは…」

「残念です…。ヒナギクさんの長い髪、とっても好きだったのに」

「ええ！？ちよつとハヤテ君！？」

「さよならです。ヒナギクさん…」

「そんな…！！」

回想終了。

「グスッ…うう…」

あれ…？なんで涙が…？

「わー！？なんで泣いてるのよ！？ヒナ！？」

「だって…負けたら…」

「…大丈夫よ。相手もおそらくヒナをナメてかかってくるわよ。一度勝ってるならなおさらね。…スキをつくしかないわ」

「…そうね。まだ勝負はわからないわよね！！」

「ふふっ！！ヒナらしくなったわね」

「エミリー…」

「ほら、もう行く時間でしょ！？遅れて行ったら尚更相手にバカにされるわよ」

エミリー…本当に…。

「ありがとう…」

「その言葉は…勝ったときまで取っときなさいよ!! 負けるな、ヒナ!」

そして午前中の講義を受け、私はフェンシング部の練習場へ。その途中…。

「おや、これはこれは白皇生徒会長。これから試合ですか？」

「野々原さん！…どうして試合のことを…？」

「フェンシング部の部員たちが言いふらしてましたよ。これから女王ミシエルが試合をするって…」

「女王？なんだかすごい通り名ね…」

「フェンシング部の練習場はたくさんの人で溢れているようですね」

え！？…完全アウェイね…。ミシエル…まさかみんなの前で私を倒そうっていうの？

「野々原さん。何か…アドバイス、ないんですか？」

「アドバイス？」

「ほら、野々原さん、執事だし…」

「私は主を正しい方向に導くために強くなっただけですよ。…そういう個人的な闘いには興味がないですよ」

「そうですか…」

「けど強いて言うなら…」

「言うなら？」

「誰かの為に闘う…という想いがあれば…勝てると思いますよ」

…はあ。よくわからない。

「とにかく技術では完全に負けます。気持ちの問題ですよ」

「それは…なんとなくわかります」

「では…私も観戦しますから…」

…アドバイス…。結局もらえなかったわね。ま、要は負けて元々…。
当たって碎けて…。

「そ、そんな弱気じゃ負けだわ！勝つのよ、絶対に！」

私は自分に活を入れ、いざ決戦の舞台、フェンシング部練習場へ入るわ！

…え！？なにこれ！？

「うおー！来たぞ！」

「あいつが日本からの留学生か！」

「やっちゃんミシエル！」

「女王の実力見せてやれ！」

…アウェイどころじゃない。敵本陣ど真ん中よ！…千人はいるわね。言うかなんでこんな広い練習場があるのよ！まるで武○館じゃない！

「来たわね…。島国！」

「な…！ミシエル！」

「昨日はまぐれよ！今日こそ私が完全無欠ということを教えてあげる！」

…言うわね。さすがは全英準優勝…。自信が違う！

「さ、舞台に来なさい」

「…いいわよ」

…今さらだけどこんな狭いんじゃスピード勝負には持ち込めない…。勝負はカウンターで決めるしか…。

『さあ！遂に女王ミシエルが留学生ヒナギクと一騎討ちだ！』

すごいわね…。実況までいるんだ。

『ミシエル！意気込みを聞こうか！』

「素人が私に勝てるわけないわ。一瞬で終わらせるわ。瞬きすらさせない」

ぐ…！何よ！偉そうに！

『次はヒナギク！女王の胸を借りるつもりで頑張ってくれ！』

…え？私のコメントなしなの？

『両者、準備はいいか！？』

「愚問よ！」

「いいわよ！」

『開始！』

先手必勝！

「はあっ！」

キーン！

く…！弾かれた！

「相変わらずね！次は私よ！」

ガキーン！

「ぐっ！」

ふ、防げた！？うそ！？

「へえ…。小手調べとはいえ防ぐとはね」

『なんとミシエルの攻撃を防いだ!?』

「落ち着け!…最後に勝つのは…誰!？」

…あの…試合中よね? 高々と右手を突き上げて…。

「女王!! 女王!!」

会場は女王コール…。だけどスキができたわ!

「スキあり!」

ガキキ!

「読んでたわ! まさかこんな甘い餌に食いつくなんてね!」

わ、罨!?

「終わりね!はっ!」

チッ!

え!?!今度は…完全にかわせた…!?

「なんで!?!今のは渾身の一撃だったのに…」
『女王ミシェル!?!まさかの攻撃ミスだ!素人ヒナギク、大健闘だ!』

昨日のエミリーとの練習の成果かしら…!?!勝てる気がしてきた!!

「…調子にのって…!」

けど…ミシエルに一撃お見舞いするには…どうすれば…!? あ、そう言えば今朝…

「ヒナ、本当に相手はミシエルって言うの？」

「そうよ。…それがどうかしたの？」

「なんとなくだけど…。彼女には下からの突きと見せかけて右側に突けば気がするの」

「…何、それ？」

「なんとなくよ。気が向いたらやってみたら」

なんて言っただわね…。

「行くわよ!はあっ!」

まずは屈んで…。

「何してるの!?!島国留学生!」

一度フェイント!

シャツ!

「うっ!?!ブラフ!?!」

そして最後は…！

「はぁあっ！！」

バチィィ！！

「…わざわざ見送りまで空港に来なくてもよかったのに…」

「いいじゃん！ヒナ、今度は1人だけど平気？」

「痛いところくわね…。エミリー…」

「ま、彼に会えるんだから…いいじゃない」

「だから…」

「わかってるって。じゃ…ヒナ…」

「エミリー…」

短い間だったわね…。でも…。

「こらーっ！ヒナギク！」

こ、この声は！？

「ヒナギク！今日帰るなんて聞いてないわよ！」

「ミシエル！…もしかしてあなたも見送りに？」

「ち、違う！憎きライバルが勝ち逃げするのを黙って見てるなんてできなかっただけよ！」

ラ、ライバル？

「なんであなた剣道やってるのよ！私に勝つほどの実力があるんだからフェンシングやりなさい！」

「あれはマグレよ。100回やってたら残りの99回はミシエルの勝ちよ」

「マグレ！？そのマグレに負けた私の気持ちはどうすればいいのよ！！」

「うるさいわね、ミシエル！黙って見送りなさいよ、バカ！！」

「げ！？エミリー！なんであんなが！？」

え！？エミリーとミシエルって…知り合いなの？

「エミリー。ミシエルのこと知ってるの？」

「知ってるも何も…。全英フェンシング高校の部決勝戦でミシエルを倒したの…私よ」

「ええ！？エミリー、全英チャンピオンだったの！？」

「そうよ。びっくりした！？」

「…練習で勝てなくて当然だわ」

「なに！？ヒナギク、あなたまさかエミリーに指導してもらったの！？」

「まあ…」

「ぐ…！！反則よ！エミリー！あなたまさかヒナギクに私の苦手な攻撃法を教えたでしょ！」

「どうだか…。でも指導したからって…最後はやっぱりヒナの実力よ」

「エミリー…。本当にありがとう！」

「いえいえ」

…もう時間か…。

「じゃあ…行くね!」

「バイバイ! ヒナ! また…来てよね! 来なかったら私から会いにいつちやうわよ!」

「ヒナギク! 勝ち逃げなんて許さないからね! 絶対にまた闘うわよ!」

「うん! 二人とも…さようなら!」

ありがとう…エミリー。私、あなたがいなかったらイギリス留学、うまくいかなかったと思うわ。…支えてくれてありがとう! いつかまた会えるよね? それから…日本にいるあの人も…。フェンシングでミシエルと闘ってる時、声がしたような気がしたの…。

『ヒナギクさんなら…絶対に勝てますよ! 諦めるなんて、らしくないですよ!』

私は…1人心で呟いたわ。

『あなたの為に…絶対に勝つ!』

って…。別にあの人の為に戦ったからどうって問題じゃないけど…。

心の支えになってくれた…。どんなに離れてても…愛歌さん、ハル子、泉、理沙、美希、歩、ナギ…。日本のみんなが私を応援してくれた…。そして…。やっぱり…最後に心に出てきた彼に私は言いたい。ありがとう…。って。

『私もいますわよ』

…マ、マリアさんも支えてくれたし！…どこから出てきたのかしら？…さて、これで飛行機に乗って帰れば私、桂ヒナギクのイギリス短期留学もおしまい。だけどいつかまた…来れるよね。

完

最終回「帰りたい。帰れない。さよなら…みんな…」（後書き）

短い間ありがとうございました！ちなみにお気づきかもしれません
がサブタイトルは私の好きなアニメのED歌詞から借用してます。
金曜ロードショーでやってたら毎回見ます。留学ネタもそこら
いいただきました。最後…胸がドキドキしますよね。あのラストは。雫
だっけ？あの女の子。男の子はバイオリン作ってたんだっけ？最初
は仲が悪いけど最後は…って話を作りたくてオリキャラもちよつと
凝って考えました。ED曲はもちろん…カン○リーロード！！…泣
けますよね。と言うわけでこれからは本編に集中します。皆さん、
読んでくれてありがとうございます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7218h/>

桂ヒナギク！イギリス短期留学編!!

2010年10月10日04時43分発行